

文壇片隅四十年

ととまじり

田岡典夫

平凡社

ととまじり 定価二、〇〇〇円

一九八一年二月一六日 初版第一刷発行

著者——田岡典夫
た おかのり お

発行者——下中邦彦

発行所——株式会社平凡社

東京都千代田区四番町四番地一

郵便番号一〇二 振替・東京八一二九六三九

電話(〇三)二六五—〇四五—(大代表)

印刷——星野精版印刷株式会社

製本——株式会社石津製本所

© Norio Taoka 1981

Printed in Japan

製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい(送料は小社負担)

ととまじり◎目次

七釜洞	土佐がえり	博浪余話	虎の顎	しばてん榎	博浪沙	「善平」の客
167	151	117	91	63	25	5

人名索引	あとがき	跡 乱 堰	東行西帰	百 雑 碎	瓢 箆 駒	ゴタゴタ期
354	348	319	285	233	215	189

装丁「山崎
登

「善平」の客

これは私が東京の橋場にあった日本俳優学校に通っていたころの話である。

日本俳優学校というのは、六代目尾上菊五郎が校長という風変りな学校で、予科が二年、本科が三年あり、私は昭和六年に予科二年へ入り、十一年に卒業した。それだから、日時はハッキリしないけれど、だいたい、昭和八年前後のことであり、すでに半世紀にちかい昔のこととなってしまった。

昭和八年前後というと、あの五・一五事件と二・二六事件とのあいだ、つまり、暗い谷間の期間であり、そして、一步、一步、戦争への道をたどらされている時代である。したがって、私たち庶民の日常も、重苦しく、陰鬱であった「はず」である。

しかし、庶民というものは、好むと好まざるにかかわらず、その時代に対応して生きてゆかねばならない。そして、明日の国家・社会の安危よりも、とりあえず、今朝の味噌汁の味のよしあしが問題なものである。その、重苦しい、陰鬱な空気を身にかけてはいても、夕陽のわずかな日だまりをもとめて日向ぼっこするように、その日、その日の安逸をもとめて暮している。たとえば、為政者のかけごえにに応じて、形ではねじ鉢巻はしてみせるが、心ではなお、エロ・グロ・ナンセンス時代の夢を追っているというのが実情であった。

ことに高知の町は、もともと、南国的駢蕩さに満ちた町である。時局がだんだんと緊迫して来ている中でも、まだまだ、のんびりしていた。喫茶店で一杯のコーヒーを前にして、「おうの（やれやれ）、きょうはどうして暮そうぞ」と、身をもてあまして、半日もねばっているような、泰平の逸民的な人たちがさえあったのである。

そのころの高知の町は、播磨屋橋が幹線道路の交叉点の名に昇格したほかは、明治・大正のころから、あんまり変化していなかった。

五丁目の八幡さまのあたりは坂であつたし、乗り出しや使者屋橋のあたりでは、電車がキィーキィーときしりながらカーブしていたし、下知しもじから東はほとんど田圃で、その田圃のかなたに遊廊（下の新地）の裏側が、電車の窓からわびしく眺められたものであつた。

そして、そのころの盛り場といえば、京町から新京橋をぬけて種崎町までの一帯であり、いま繁華街となっている帯屋町は、まだ昔の屋敷町の面影をのこして、市の立つ日いちだけは賑やかだが、ふだんはむしろ閑散とした町であつた。

これは余談になるが、この帯屋町の南側にあつた古本屋の一方堂は、私にとって愛着の深い店である。東京の中学校へいつているころ、帰郷すると、いつもここで古本を漁ったものだ。それで、いま、私が持っている土佐関係の古本の、十の八までがこの一方堂で買ったものである。

そして、私は四十年ちかく作家渡世をしているが、「土佐屋さん」とアダ名されるほど、作品

の十の八までが土佐を題材にしている。してみれば、私が細々ながらも作家渡世をつづけてこられたのは、一方堂が存在していたおかげとも言えよう。

帯屋町と堀詰とのあいだには、大きな侍屋敷何かを取りこわしてできたらしい、新開地とよぶ商店街があった。商店街というとりつばそうだが、要するに、安物店や小さな飲食店、パチンコ屋などが、ゴチャゴチャとならんでいる一廓なのである。おでん屋の「善平」はその帯屋町寄りのところにあった。三坪そこそこの店だが、高女出のエイチャンが看板娘で高知高校生にファンが多くてなかなか繁昌していた。

私は、始めに記したように、ノンビリした学校に通っていたから、夏休みはもとより、冬休みも春休みも高知に帰って来て、倦きるまでブラブラしていた。そして、そのブラブラしていると、よく「善平」へ出かけたものであった。

二

私はカラ下戸げこなので、「善平」へ行っても酒は飲まず、もっぱら、食う一方であった。ある日、例によっておでんを食っていると、

「出たぜよ、出たぜよ——見たかよ、見たかよ」

と、わめきながら、ツムジ風のように飛びこんで来た男があった。

「こまった、こまった、げに、こまった」

男はあっけにとられてゐる私たちの、誰にともなくそう言い、そして、手にしている新聞紙をふりまわしながら、

「こんなことを書かれると、げに、こまる——あしヤア（俺は）かまん、あしはかまんけど、ヨネチャンにわるうてたまらん、こまった、こまった、げに、こまった」

うれしさいっぱいという声でそう言ったかと思うと、また、ツムジ風のように飛び出して行った。

男の姿が見えなくなつてから、私たちはやつと事態が呑みこめた。

そのころは、スキャンダルばかりを満載した、いわゆる「赤新聞」なるものが、まだ、二つ三つ存在していた。その赤新聞に、あの男とヨネチャンとかが、どうしたこうしたという記事が出たのだ。そこで彼はうれしくてたまらず、「出たぜよ、出たぜよ、見たかよ、見たかよ」と所々方々へ吹聴して廻つてゐるのであった。

また、これは連れがあつたか、私ひとりであつたかハッキリ覚えていないが（連れがあつたとすれば中学校の先輩久万俊文さんである）、やや肌寒くなつたある日の夕方、「善平」へ行くと、モジリを着て烏打帽をかぶつた先客があつた。年配は五十ちかくであるうか、恰幅のいい温顔の人物である。

その人はサビのある低い声で銚子のおかわりを注文してチビチビと飲んでいるのだが、そのエイちゃんとのやりとりの口調が、いかにも齒切れのいい東京弁であった。

私（あるいは私たち）はその横にならんでおでんを食べていた。すると、そこへ、

「やあ、これはヨシイハク——」

と言いながら入って来たものがある。それは高知県立図書館長の中島鹿吉さんであった。

「ヨシイハク、いつ出ておいででしたか、ああ、そうですか、して、ヨシイハク、このごろ、御健康はいかがです、はあ、それは結構ですな、ヨシイハク」

と、中島さんはしきりとヨシイハクを連発しながら、その人に話しかける。そして、私のいるのに気がついて、

「田岡君、あんたも来ていたのか、——ヨシイハク、こちらは田岡嶺雲の甥の田岡典夫です——田岡君、こちらは吉井勇伯爵」

と、紹介してくれた。吉井さんはそのころ、高知県香美郡猪野々の溪鬼荘におられて、ときどき、高知の町へ出てこられていたのだ。

親切に紹介してくださった中島さんではあるけれど、天下の歌人吉井勇を「ヨシイハク」「ヨシイハク」というのは、私にはいささか笑止に思われた。そして、ひがめかもしれないが、吉井さんも「ヨシイハク」にすくなくらず辟易のいで、中島さんが、用事があるから、と言って帰

ってゆくと、どうやら、ホッとされたようすであった。それで私は「先生、席をかえましょうか」と誘い、近くのクッサンハイヤーの車で「得月楼」の本店へ行った。

そのとき、吉井さんは、「君は土佐人で、六代目の学校へ行っているから」と言って、扇子に「馬楽忌や酔万太郎酔柿紅」という句を書いてくださった。吉井さんには嘶家の馬楽を主人公にした戯曲がある。万太郎は久保田万太郎、柿紅は岡本柿紅でいずれも劇作家であり、そして柿紅は土佐人である。まことに、芝居にも土佐にもゆかりの深い句を頂戴したのであった。

三

前に述べたように吉井（勇）さんと初めてお目にかかったのは、偶然、吉井さんと私が「善平」にいたところへ、偶然、中島図書館長が通り合わせたという、つまり、偶然が二つかさなったためである。

そして、翌年、私が土佐へ帰って来たときには、吉井さんは溪鬼莊を引き払って、築屋敷（高知市の地名）に来ておられた。そのころは高知市内では新京橋の世界館と堺町の大山館の全盛時代であったが、当時の映画館は二階が上等席で畳敷になっており、すいているときは足をのばして、楽々と見ることができた。その二階でよく吉井さんにぶつかり、映画がすむときまっとうに「得月」へ出かけた。

初めてお宅へうかがったのは、東京から奥さんがこられたのちで、いわば吉井さんが第二の人生を迎えられたときであった。それは築屋敷の堤のすぐ下にあり、古びてはいたが落ちついた家であった。のちに、つまり、終戦後から南海大地震のころは町田昌直（眼科病院長）さんが住んでいられた家である。

そのときはなんでも七、八人で押しかけたのだが、その中に久万（俊文）さんがいたことはまちがいない。

というのは、ちょうどその両三日前、吉井さんは従何位から正何位というふうに昇叙されたことが新聞に載っていたので、誰かがその祝辞を言った。すると私が「へえ、そんなときにはお免状か何かをくれるのですか」と、訊ねたことを、あとで久万さんに笑われたことを覚えているからだ。そして、私の愚問に吉井さんが苦笑されたことも覚えているが、なんという返事であったかは忘れてしまった。

このとき、吉井さんも奥さんも、ふいに七、八人がドヤドヤと押しかけて来たので、面くらわれたらしいが、こころよく通してくださり、一時間ちかくお邪魔したものであった。

この押しかけて行った人びとの半分は、喫茶店などで吉井さんにお目にかかったことはあるけれど、かくべつ、話などしたことのない人たちであった。「グリコのオンチャン」はそのひとりである。グリコのオンチャンというのは今村（？）さんのことで、彼は胸がわるいとかで、毎日、

五十銭だか一円だかを袂に入れて町に出、喫茶店やパチンコ屋で時をつぶしているという、閑人^{ひまじん}中の閑人であるが、気の毒な閑人であった。そして、パチンコでグリコをとると、かならず、そのへんの子供にそれを与えるので、子供たちは「グリコのオンチャン」と言って、いつもぐるりに集まっていたものである。

それだから、誰かがそのことを話して吉井さんに紹介した。吉井さんが「なぜ、グリコばかり取るのかね、ほかの景品もあるだろうに」と言われると、今村さんはまじめな顔で、「グリコはいちばんうもうて、それに栄養がありますきに」と答えたので、「なるほど、グリコのオンチャンだな」と、吉井さんはめずらしく声を立てて笑われたものであった。

それから、ちょいちょい、私はひとりでお宅へうかがうようになったが、いったい、「得月」の酒席でも、また、お宅へうかがったときでも、どんな話が出たのかは、すっかり、忘れてしまった。

だいたい、吉井さんはもの静かで、口かずのすくないかたであるし、私は吉井さんに対して語るべき内容を持っているはずがない。したがって、要するに取りとめのない雑談を、すこしして引きあげていたのである。

私はとにかく俳優学校の生徒であったから、そのころは頻繁に東京と高知を往復していたが、あるとき、吉井さんのお宅へうかがって、「あす上京します」と言うと、吉井さんはちょっと考え